

日付:2016年9月11日／聖書:列王記下4:25～37

説教:「手を手に重ねて」

私が以前、看護師をしていたころのエピソード。まだ幼い9歳の男の子が、余命数か月として入院して来られた。〇病院がまだホスピスケアを正式に始める前のこと。大きな病院から逃げるようにして入って来られた。特別な一室を設け、母親が24時間そばについてあげた。この子は、自分がこれからどうなっていくのか、知っているようにも感じた。当時、よく読まれていた漫画で「うしろの百太郎」という怖い、死後の世界などが出て来る漫画を何冊も持っていて、この本を一生懸命に読んでいた。とても辛く、どのように関わったらよいのか、皆手探りだった。でも時々笑いもあり楽しい時もあり、聖書の物語も喜んで聞いてくれた。

そしてすぐに、最後の時がおとずれた。ちょうど私が夜勤の時に体調が急変し、深い呼吸を何度かするような感じで、最後は静かに息を引き取った。すると母親は私に、「はさみを持って来て」と言う。「早く、はさみを！」と叫んで、私は驚いて「はい」と答えて、詰所からはさみを取り出し、…どうするのだろう…もしかして、自分も死のうと思っているのか?? いろいろ考えながらはさみを渡すと、自分の髪をバサッと切って子どもの手に自分の髪の毛を握らせて、「お母さんは、いつも一緒だよ」と泣いて叫んだ。子を亡くすということが、どんなに辛く、どんなに寂しく、苦しいことか…。

今朝の物語には、突然、わが子を亡くし、またよみがえるという奇跡物語が記されている。私たちは、このような奇跡物語をどう読んだらいいのだろうか? こんなことが聖書に書いてあるからと言って、神様を信じたら癒されるとか、奇跡が起こるとか、そういうことは中々あることではない。ただ、ここで「神の人」と呼ばれる方が、一人の人の命に向き合う姿勢に教えられたい。「…子供の上に伏し、自分の口を子供の口に、目を子供の目に、手を子供の手に重ねてかがみ込む…子供の体は暖かくなった。…」ここは、主なる神の一人の人の命に向き合う神の姿が現されている。神様は、私たち一人一人の命に、たとえ小さな命であっても真剣に向き合ってくださいということ。福音書に記されているイエス・キリストもまた、一人一人の癒しのどの場面でも、必ず、その人に向き合い、そのからだに触れてから、癒して行くということをされる。

神は、私たち一人一人の命と、また、先に召されてしまった、私たちの愛する家族、知人の命をも、神は、向き合い、また触れてくださっていることを、このところから教えられたい。神は、ご自分の口を子どもの口に、目を子どもの目に、手を子どもの手に重ねてくださる。(神谷)